

# 宝蔵解体修理

## 1.概要

附指定の宝蔵は本殿の西面の向かい側に東面して建つ。建物の大きさは桁行約6.0m、梁間約4.0m。土蔵造の二階建てで、屋根は置屋根形式（野地を土塗で覆い、その上に小屋組みをもう一段載せる）の切妻造りで、棧瓦葺きである。正面は中央に出入口を土扉とし、上部に鉄板葺きの庇を設ける。腰壁は焼杉の縦板壁、上部を大壁漆喰仕上げとする。内部は貫柱を見せる真壁状に漆喰仕上げとしている。

建築年代は不明で江戸後期（1751-1829）とされる。今回の解体では残念ながら建築年代が判るものは発見できなかった。

## 2.修理方針 【半解体修理】

破損状況は土壁全体にひび割れが入っていた。瓦は凍害による劣化が見られた。置屋根、内部造作（棚等）を解体、壁土はすべて解体したが、小舞は健全の部分は残した。壁土は練り返して組立時に使用する。

## 3.修理履歴

土壁は一度すべて塗り替えられていて当初は無い。その後も修理は何度が行われており、腰板の下の中塗り仕上げの下からは漆喰仕上げの痕跡が見られた。

小屋材、化粧垂木、化粧裏板は取り替えられ、その時、軒下50cm上は小舞から塗り直され、置屋根の登梁、小屋束等は他の建物から転用されていた。



図1 修理前南東面



図2 一階壁のひび割れ状況



図3 凍害にあった瓦

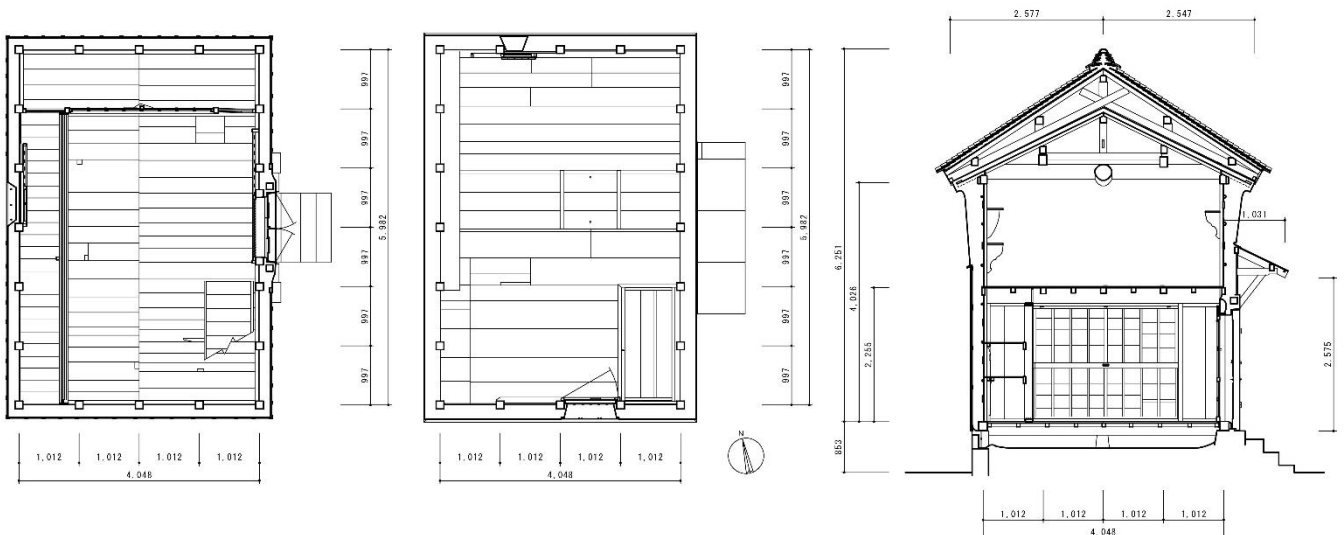


図3 平面図（一階・二階）・梁間断面図